

「岩手の復興と再生に」 オール岩大パワーを

vol.50

<http://www.iwate-u.ac.jp/koho/fukkouletter.shtml> 岩手大学ホームページからもご覧いただけます。

「岩手大学三陸復興推進機構シンポジウム」を開催しました

2月7日、「岩手大学三陸復興推進機構シンポジウム」を岩手大学北桐ホールにて開催しました。

今井復興庁岩手復興局長にご挨拶いただいた後、三陸復興推進機構6部門の活動について報告を行いました。

次に、パネルディスカッション「三陸復興と地域創生について」では、パネリストである中村岩手県復興局長、山崎釜石市副市長から、被災県と被災地域の立場から、岩手大学に対して引き続き支援を継続してほしいこと、本学の三陸復興推進活動を全国に発信して行ってほしいことなどの意見や期待が寄せられました。

また、被災地でボランティア活動を行っている三陸復興サポート学生委員会委員長（人文社会科学部2年）の佐藤希さんからは、ボランティア活動に参加する前は身構えていましたが、住民の方との交流が楽しく、また、住民の方から「大学生や若い人が来てくれるだけで復興なんだよ」と言われたことで、色々考える前にまずは行くことが大事だということに気づかされ、自分たちの役目は、同世代の友人たちに被災地の現状を伝えることなのではないかとのコメントがありました。



挨拶を行う今井復興庁岩手復興局長

さらに佐藤さんから、シンポジウム開催前に行った学生対象ワークショップで話し合った「学生だからこそメリット・デメリット」の中から「デメリットの1つとして、個々の大学生は卒業するため地域に関われる時間が短いことが挙げられるが、大学全体として見ると、後輩が入ってきて活動が継続していき、また卒業した後も関わっていけるのでメリットになる」との意見が紹介されました。

最後に、岩淵学長が地域に根差した大学として、学生の人材育成とともに、新しい岩手のために努力していくとの誓いの言葉で締めました。



パネルディスカッションの様子

学生対象ワークショップ「三陸復興と地域創生、今学生に出来ること」

三陸復興推進機構シンポジウムのサイドイベントとして、被災地でボランティア活動等を行っている学生16名を対象に、三陸復興と地域創生について学生は何が出来るかをテーマにしたワークショップを行いました。釜石市企業立地課井上諭直主事を迎え、釜石市の現状や今後の方針について話題提供いただいた後、学生たちはグループごとに「現時点における被災地の課題」「学生ならではの

被災地の関わり方」「被災地に関わることで学生は何を学ぶことができるか?」の3点からテーマを選んで討論し、発表しました。

「被災地に関わることで学生は何を学ぶことができるか?」の発表では、自身の体験から、被災地に関わることで、その地域の歴史・産業・文化・防災等を知ることにより、自分が住んでいる地域のことも振り返り学ぶことに繋がることが挙げられました。また、被災地域の課題は、他地域の課題に通じるものが多く、世代間交流ができ、ボランティア活動を行っている他大学との交流もあり、学べることが多いことも挙げられました。

ワークショップは、普段一緒に活動していない学生との交流の場ともなり、活動をする上での課題について改善するための意見をお互いに出し合う場面もありました。

最後に、ファシリテーターを務めた五味壮平人文社会科学部（三陸復興推進機構生活支援部門）准教授が、身近なロールモデルとして、被災地で奮闘する20～30代の姿を見て学んでほしいと学生たちにエールを送りました。



ワークショップの様子



学生たちに説明する井上主事

岩手大学三陸復興プロジェクト

岩手大学では岩手大学三陸復興推進機構を設置し、地域の行政や住民、他大学、企業等と連携を図りながら、教職員・学生が一丸となって東日本大震災からの復興に取り組んでいます。今回は、同じ地域に住む方々が新たな仲間として生活できるための支援を進めている生活支援部門の活動の一例をご紹介します。

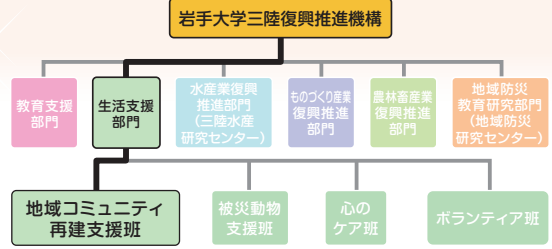
新たな仲間を得るために

三陸復興推進機構 生活支援部門 地域コミュニティ再建支援班
 特任研究員 船戸 義和

沿岸部に行くと見慣れない大きな建物を目にするようになりました。都会的なたたずまいの災害公営住宅はひととき目立った存在です。県内には5,771戸の災害公営住宅が建設される予定で、その半数近くが既に完成しています。震災で家を失った方々のうち、経済的な理由等で自力再建を断念した方々の5年近い避難生活がようやく終わりを迎えたつづきです。

しかし、多くの入居者は人のつながりから切り離され、馴染みの薄い地域に知らない人たちと暮らすことになり、地域で自然とできていた助け合い・見守り・防犯などができなくなるという不安を生みます。そこでコミュニティづくりの必要性が訴えられています。この不安は災害公営住宅を受け入れる既存の地域にも共通しています。近所に見たことのない人たちがまとまって転入する訳ですから、不安を抱くのは当然でしょう。

大船渡市の長谷堂（はせんどう）地域には2棟53戸の災害公営住宅が建



設され、2015年5月に入居が始まりました。受け入れ側の長谷堂地域公民館は約半年前から議論を重ね、入居者を暖かく迎え入れようとする準備を進めました。地域の歴史や文化を紹介した冊子、挿絵付きのご近所マップを役員らが手作りして配布したほか、7月には200人規模の歓迎会を開催して「ようこそ長谷堂へ」というメッセージを送りました。当日、地域の50人以上が朝早くから準備を進める姿を見かけた入居者は「人の温かさを感じたし、新しい生活を頑張ろうと思った」と話していました。

私たちは同じ地域に住む方々が新たな仲間として生活できるための支援を各地で行っています。長谷堂地域では新年餅つき大会も支援し、災害公営住宅と地域の方々双方が参加し、人のつながりが芽生えていることを実感しています。コミュニティ活動の主役である地域の方々が復興を実現する「主役」として生活できるように、これからも活動を続けていきます。



上平団地住民懇談会



大船渡市長谷堂地域で行われた歓迎会の様子

釜石サテライトだより

日ざしの明るさに春の気配を感じる季節となりました。

釜石サテライトでは、来年度設置の農学部食料生産環境学科水産システム学コースに関連する実験設備等について着々と準備を進めているところです。

さて、平成24年度から展開しておりますSANRIKU(三陸)水産研究教育拠点形成事業は、今年度限りで事業が終了いたします。4年間の水産業復興への貢献度及び研究成果等について現在取りまとめを行っており、総括の意味でこの事業に関し外部評価委員会を設置いたしました。

今回は外部評価の実施についてご紹介いたします。

●SANRIKU(三陸)水産研究教育拠点形成事業の外部評価 無事終了

この事業の目的、成果等を評価するために外部評価委員会を開催しました。

第1回は、平成27年11月4日に開催し外部評価委員会委員長の選出、外部評価設置要領等の決定により具体的な評価実施の準備を進めました。評価委員は7名選出され、事業に関連する4分野(水圏環境、増養殖、水産加工、マーケティング)については大学、研究機関、企業から4名、岩手県の研究機関、行政機関、漁業団体から3名の計7名の委員を選出しました。

第2回は、平成28年1月27日に開催し、①水圏環境調査班(岩手大学、東京海洋大学)、②水産・養殖班(岩手大学、東京海洋大学)、③水産新素材・加工技術・加工設備開発班(岩手大学、東京海洋大学、北里大学)、④マーケティング戦略班(岩手大学、東京海洋大学)の4つの班について、大学毎に評価項目について10件のプレゼンテーションを実施しました。3大学の4つの分野の各班長から具体的な事業の取組について、目的・計画、研究方法・実施体制、水産業復興への貢献度、現場への普及展開の有無、3大学連携の成果等についてプレゼンによる説明を行いました。各委員からは、評価着目点を中心に質問、意見等が多数交わされ、有意義なプレゼン審査となりました。

なお、プレゼンに先立ち、各班の研究テーマである36テーマすべてに

ついて、各班で取りまとめた研究成果報告書及び自己点検評価に基づき、評価委員から事前に評価点による評価及びコメントを頂きました。これらの評価とプレゼンテーション時の評価を併せて総合的に評価(評価点による評価及び総合評価コメント)していただきました。4年間のSANRIKU(三陸)水産研究教育拠点形成事業の評価結果については、今後精査し取りまとめ公表するとともに、教育研究に資する外部資金獲得及び研究プロジェクト申請のために活用することとしています。



プレゼンテーションを評価する外部評価委員

今後、様々なプロジェクトが展開される中で、現場窓口としてサポートさせていただきます。

連絡先 岩手大学三陸復興推進機構釜石サテライト

〒026-0001 岩手県釜石市平田第三地割75-1

TEL:0193-55-5691(代表)/FAX:0193-36-1610

E-mail:kamaishi@iwate-u.ac.jp

URL:http://www.iwate-u.ac.jp/reconstruct/kamaishi/